

座談会

創価学会・憂宗護法同盟を破折する（終）

御相承の本義をねじ曲げる創価学会 不遜極まる血脈軽視の大謗法発言

昨年の本紙十月一日（六三〇）号を皮切りに、これまで四回にわたって掲載してきた当座談会では、総監・藤本日潤御尊能化をはじめとする御僧侶方に御出席をいただき、創価学会・憂宗護法同盟による血脈相承への疑難・誹謗等に対して徹底的に破折していただきました。

そして第五回の今回も引き続き、最終回として彼らの悪書『法主詐称』等における邪難を、完膚無きまでに徹底的に破折していただきましたので掲載いたします。

座談会出席者

日蓮正宗総監・常泉寺住職

藤本日潤御尊能化

宗務院庶務部長・法道院主管

早瀬日如御尊能化

大石寺主任理事・妙泉坊住職

八木日照御尊能化

大宣寺住職

菅野日龍御尊能化

宗務院庶務部副部長・妙國寺住職

阿部信彰御尊師

新池田創価学会・憂宗護法同盟の

最悪書『法主詐称』を完全粉碎

唯授一人の血脈相承への妄言

司会

『法主詐称』では「唯授一人の血脈は、それを継承する法主一人の力、働きで維持厳護されてきたものではない」とか、「法主と当時の大衆（僧俗）が、ある時はせめぎ合い、ある時は補い合い、共同の連関作業として『唯授一人の血脈』を成立させてきた」などと述べておりますが。

八木

そのようなことは改めて言うまでもない、当然のことです。「せめぎ合い」などという彼らの言葉は誤りだが、仏法には師資という言葉がある通り、資には広く門下の大衆も含まれる。弟子である僧俗が、師の御法主上人をお資け申し上げ、僧俗異体同心して広宣流布・令法久住をめざすことが宗門本来の在り方なのだからね。

藤本

その通りだが、だからといって、創価学会一味のように、師の立場にあられる御法主上人と弟子の僧俗との関係を対等のように考えるのは不遜極まりないよ。日興上人が「血脈の次第 日蓮日興」の御相伝の上から、後代の門家一同に「極理を師伝し」と御遺誡せられる通り、大聖人の仏法の極理を師伝あそばされるお方はあくまでも唯授一人の御法主上人にあらせられるわけだからね。

阿部

特に彼らが現宗門に対して、「あらゆる時代を通じて実在した無数の相互の力関係を見捨て、切り捨ててしまった」などと、まるで宗門が過去の大衆（僧俗）を無慈悲にも見捨てたように非難することは、まったく道理にも史実にも合わない、でまかせの妄言ですね。

早瀬

その通りだよ。宗門は御法主日顕上人猊下の御指南のもと、大石寺開創七百年から十二年間の僧俗一致の精進により、宗旨建立七百五十年法華講三十万総登山を見事に達成することができたが、この広宣流布大前進の功績は、悠久七百五十年の歴史を築いてきた日蓮正宗僧俗全員に帰することは言うまでもないね。むしろ宗門は過去の僧俗の功績を最大に顕彰していることになるわけだよ。彼らの恨みがましい「切り捨てた」との文言が、自分たち創価学会が破門されたことを指すのなら、これは日興上人の身延離山の御精神からも切り捨てられて当然だ。謗法厳誡正法護持に、末法万年の一切衆生の成仏がかかっているわけだからね。

菅野

それに関連することだけでも、戦後の宗門において、第二代会長・戸田城聖氏の指揮のもとに、創価学会が広宣流布に大きく貢献したことは否定できないが、その戸田会長は岡山妙露寺の入仏落慶法要の折、総本山六十五世日淳上人に対して、「将来、もし学会が大きくなって、宗門に圧力をかけたり、あるいは内政干渉をするようなことがあったら、いつでも解散をお命じください」と申し上げている。この戸田会長の言からすれば、あの

昭和五十二年度路線の謗法逸脱についての御先師日達上人に対するお詫びを無慙にも反故にし、その上、あろうことか御当代日顕上人猥下への血脈相承を否定して、下種三宝を破壊せんとした池田創価学会は自ら解散すべきであり、解散しないのだから破門されて当然だね。

八木

それと、宗門には創価学会が誹謗するような法主絶対などということはないし、御当代日顕上人猥下を現人神のように敬っているとか、宗内の僧侶が御法主上人の威圧を恐れ、盲目的に恭順の姿を装っているなどという批判も彼らが創作した大嘘だね。宗門は御法主上人猥下の御指南のもと僧俗一致、勇気凛々と「『立正安国論』正義顕揚七百五十年」の佳節をめざして大前進していることが、顛倒した彼らには見えないのか、あるいは見えても悔しくて見えないふりをしているんだろうな。

阿部

次に『法主詐称』では、堀日亨上人が「血脈相承の断絶等に就いて史的考察及び弁蒙」（大正十二年）の中で、「『信仰の対象』と『尊厳の対象』とを明確に区別されている」として、現在の宗門があたかもこれを混同しているかのように誹謗し、「『仏法と御本尊に対する信仰』と、『法主に対する尊厳』、この二つは混同してはならない」などと述べています。日亨上人の御文にはそのような文言は見当たりませんが、与えて論じても、宗門にそのような混同などありません。

藤本

言うまでもないね。前にも取り上げたが、池田大作の「あくまでも、御本仏は、日蓮大聖人様であらせられ、唯我与我の御法主上人のご内証を、大聖人と拝すべきなのであります」（聖教新聞昭和五十四年五月四日付）との言葉の通りだよ。御歴代上人を単に「尊厳の対象」とするのは、歴代の御法主上人の僧宝としての外用のお立場を意味するものだな。それに対して、御本尊の法体の血脈相承を受けられた上での御法主上人の御内証の辺は三宝一体であり「信仰の対象」に含まれることは当然だよ。その辺の法門の立て分けが理解できないんだな。不信心の彼らには。

八木

御法主日顕上人猥下を「狂乱」などと、とことん罵詈雑言する悩乱した連中ですから、その辺の甚深の法門を領解することは土台無理でしょうね。彼らは宗門が御法主上人の御指南のもと、一糸乱れず僧俗一致、広宣流布に邁進している状況が、悔しくて悔しくて仕方がないんだろうな。自業自得とはいえ哀れな者たちだよ。

司会

次に彼らは「血脈相承の本義」などと掲げて、日亨上人が血脈相承について何か問題を提起されたように述べていますが。

早瀬

彼らが言う日亨上人の御指南とは、先程話に出た「血脈相承の断絶等に就いて史的考察及び弁蒙」のことだね。しかし、日亨上人は決して血脈相承について問題があるなどとはされていない。むしろ逆にいろいろな考え方ができると挙げられた上で、それらは局外者の抽象的な議論であり、宗門教権の大事を批判すべき基準にしてはならないと制御されていたと思うよ。

菅野

たしかに日亨上人はその御指南の中で、十五世日昌上人から十六世日就上人への御相承についての例を考察されています。これは就師は昌師の御臨終に間に合わず、御相承の儀

式は行われなかったが、昌師から就師への御相承は既に二十年以上前の慶長十二年に決められたことであり、以後就師は何度も大石寺へ登ったとされ、かかる法の内付の意義の上から、日亨上人は就師を「適格の権威」ある「実人」と呼ばれたものだね。そして次に御相承の儀式を法式と呼ばれ、法式は単なる形式に過ぎないのだから、昌師から就師への内付による御相承は、相承の儀式はなかったとはいえ血脈断絶にはならないとされているね。

八木

そう。日亨上人は、そこまで周到に血脈相承の意義を論証なされた上で、「作法にのみ大権威存在して実人は何人でも宜いと云ふ事ならば」と述べられ、御相承の儀式にのみ権威があるとするのなら昌師から就師への場合は血脈断絶になるとされ、そしてまた、血脈相承が、「適格の権威ある実人」と「御相承の儀式」の両方を不可欠とするものなら、昌師から就師へ場合は法水が一時枯渇したことになるとも言われる。そして、その上で、このように考えること自体、局外者の議論、すなわち信仰のない外部の者の議論であり、宗門の教義の根本に対する批判に用いてはならぬとされているわけだね。

阿部

ということは、日亨上人は、本宗の血脈相承の根本的な要件は「適格の権威ある実人」にある、すなわち御先師からの実質的な付法こそが血脈相承の真義であると考えておられたことが明白ですね。

藤本

『法主詐称』では「嘘をついて登座した日顕は、その出発点からして『嘘人』である」などとし、信・行・学を怠れば、法主といえども「実人」から「嘘人」に転落するなどとして、御法主日顕上人猥下を誹毀謗しているようだが、御先師日達上人による御当代日顕上人への法の内付が厳然たる事実であることは、御法主上人の御指南はもとより、これまでに様々な立場の宗門の僧侶が証明しているし、さらには創価学会池田大作の御法主日顕上人に対しての十年間に及ぶ無数の尊重讃歎・信伏随従の言葉もこれを裏付けているね。したがって、日顕上人はまさに日亨上人仰せの「適格の権威ある実人」であられるわけだし、信・行・学の観点からも、彼らの言う「嘘人」などではなく、宗内随一の「実人」であられることは言うまでもないね。

日亨上人の血脈観への冒涇

司会

『法主詐称』ではさらに、日亨上人が昭和二十六年に身近にいた僧侶に「柱師が知っておられるほどの相承は、ワシはすでに知っておる。何も三千元で相承をわざわざ買う必要などない、だから三千元の相承はワシには必要ないと突っぱねた」と発言されたなどとしていますが。

八木

謹厳な日亨上人が、そのような不謹慎極まる発言をされるはずはないね。この連中は日亨上人が御存命でないのをいいことに何でも言いたい放題だね。もし日亨上人が言われたとすれば、「宗門として三千元を日柱上人に差し上げる件は、あくまで御隠居料としてあって、御相承に対する対価などではない」という意味ではなかったのかな。

司会

そう思います。大正十五年三月八日の日柱上人から日亨上人への御相承の儀式は、大石寺客殿において厳粛に執り行われたことが記録にも明らかです。

阿部

さらに『法主詐称』では、日蓮正宗の血脈相承を誹謗して、日柱上人は堀上人に伝えるべきものは何もなく、同じく昭和二十六年の冬に、日亨上人が日柱上人を「信仰もなく学も行もない、親分・子分の関係を強いているヤクザの貫首」と批判したとか述べています。

菅野

この発言もまったく日亨上人の御言葉とは考えられないね。それというのは、日亨上人は昭和二年十一月二十日に宗内僧俗に対し、管長辞職の経緯につき告白されているが、その中で、日柱上人については、「大正四年に日柱師を学頭に推挙するの主動者となりてより同十二年に五十八世の猊座に上らるまで直接に間接に力めて障碍なからしむるやうにした」と述べられているからだ。この御言葉は日亨上人の日柱上人に対する信頼と評価を示していることは当然だよ。もし日柱上人が本当に「信仰もなく学も行もない、親分・子分の関係を強いているヤクザの貫首」のような方であったのなら、日亨上人ほどの正義感の強いお方が、自ら中心となって日柱上人を学頭に推挙されたり、さらにそれだけではなく、種々助力なさるはずなどないではないか。

阿部

『法主詐称』で創価学会側が述べている日柱上人に対する日亨上人の激烈な悪口が、まったく事実と異なるでっち上げであることがよく判りました。両上人に対して本当に恥知らずな無慙なことを平気で言う連中ですね。

司会

『法主詐称』はさらに日亨上人が五十一世日英上人の言葉を引き合いに出して、「嘘つき法主は論外」と語ったとして、御法主日顕上人猊下を誹謗する根拠とされています。

早瀬

これもいい加減な伝聞に過ぎないわけだ。悪意でねじ曲げた内容だから、仮に日亨上人に何らかの発言があたりだったにせよ、最早、日亨上人の仰せとは到底言えるものではないと思うよ。まして日亨上人が「いずれそのうち、平僧や信徒を迫害しぬく猊下も出てくることだろうよ」と仰せられたなどということは、前の例と同じで絶対に有り得ないね。堀上人にかこつけて、まさに創価学会が言いそうなことだよ。

阿部

次に『法主詐称』で創価学会側は、先に出た日亨上人の「血脈相承の断絶等に就いて史的考察及び弁蒙」の冒頭に、「吾宗本山代々貫首の血脈相承と云ふ事が頗る高潮せられたり、又大に冷評せらる事があるやうである」と書かれていることにつき、これが堀上人の血脈についての見方の基本だとして、御法主日顕上人猊下を「破器」だの「汚器」だのと誹謗に結びつけていますね。

八木

しかし彼らが御法主日顕上人が述べたとする「学や徳がなくとも、相承を受けた者はみな身の釈迦日蓮になる」という御指南をお聞きしたことはないね。これは『続家中抄』の書状中の文言だよ。まったくいい加減なことを言う者たちだ。宗門の者なら誰でも『御本尊七箇相承』の「代代の聖人悉く日蓮なりと申す意なり」（日蓮正宗聖典三七九・）の御相伝は領解奉っているし、それは御内証として拝すべきことも十分に領解して

いる。過去の池田大作の発言の通りだよ。御法主上人が血脈相承につき御指南せられたとすれば、その御内証の意義を述べられたものであることは言うまでもないね。

阿部

また彼らは『法主詐称』で、日亨上人が、「口伝なるものは完器にして始めて可能」と述べたなどとして、京都・要法寺出身の御法主が九代、百年間続いたことを破器・汚器になぞらえて暗にその間は口伝がなかったように論じ、その後にお出ましになった日寛上人を完器とするのが日亨上人の見解であるとしておりますが。

藤本

それもまったくの誤りだよ。日亨上人は彼の「血脈相承の断絶等に就いて史的考察及び弁蒙」の中で、京都・要法寺から大石寺御歴代に登られた第十六世日就上人について、「若し実人に適格の権威あらば授受の作法は此を結成するの型式に過ぎざるから就師のような場合でも、血脈断絶法水壅塞の不都合はない訳である」と述べられているね。すなわち日就上人について「適格の権威ある実人」と見なされているわけだ。もし破器や汚器だと思っておられれば、実人と仰せになるはずがないんだよ。

御法主上人猊下を 管理人とする邪論

司会

次に『法主詐称』では二箇相承を挙げて、この二つの相承が日蓮大聖人の御相承の原点だとした後に、「法主は『一間浮提総与』の御本尊の管理者」であるとして、御法主上人猊下を単なる大御本尊の管理人にすぎないように述べています。

菅野

二箇相承はたしかに日蓮大聖人の仏法を総括的に日興上人へ御付嘱あそばされた重要な相承書だが、『御本尊七箇相承』など、法体法義の重要な相承書は他にも存するわけで、二箇相承以外は御相承書としての意義を認めないという態度は誤りだね。

早瀬

また彼らはここで、日蓮正宗の御法主上人猊下を国宝を所蔵する博物館の館長と列に見なして、「貫首とは、あくまで大法の流布を宗祖から預託された管領者に過ぎない」とか、「『弘通の大リーダー』であることが日蓮大聖人からの『相承』の原則」などとしている。要するに御法主上人猊下の僧宝としての外用のお立場のほかは認めないということだよ。「弘通の大リーダー」はまだしも、御法主上人を博物館の管理者のように言うのはまったく推尊入卑だ。いったい、博物館の館長に国宝とまったく同じ価値を有する作品を作る能力があるのかと言いたいね。

藤本

その通りだよ。たしかに僧宝としての御歴代上人の重大な使命が令法久住にあられることは言うまでもないが、『御本尊七箇相承』に記される通り、御法主上人猊下の御内証の辺は日蓮大聖人と拝すべきことは当然のことです。だからこそ、本門戒壇の大御本尊の仏力法力を余すところなく具え給う御本尊を御書写あそばされるわけだからね。ただの管理人がそのような力を見えるはずはないね。

司会

次に『法主詐称』では、御法主日興上人猥下に対して、「廃嫡処分」だ、「錯乱した嫡子」だなどと狂乱としか思えない暴言を吐いておりますが。

八木

彼らは「血脈の次第 日蓮日興」の『身延相承書』や、『原殿書』などを引いて、唯授一人の血脈の本義は「聖人の御義」であり、「本師の正義、本懐」であるとし、それに対して、宗門では「大聖人の仏法の化儀化法の一切の決定権は時の法主一人にある」とするのは、根本とすべき「聖人の御義」に反する法主絶対化だと批判するわけだね。

菅野

その彼らの考え方には大きな誤りがあると思う。それは根本の「聖人の御義」は一体誰が伝えたのかということだよ。いかに「聖人の御義」が尊くとも、邪宗身延派の五老僧やその大衆が預かれれば、「謗法の汚泥にまみれた邪義」と化してしまったことは言うまでもないからね。

早瀬

そこに日興上人以来の宗門の血脈相承の尊さがあるわけだ。たしかに『日興跡条々事』に、「一、大石寺は御堂と云ひ墓所と云ひ日目之を管領し、修理を加へ勤行を致して広宣流布を待つべきなり」（御書 一八八三・）と仰せのように、日目上人以下、御歴代上人のお立場は、宗門を統率し、総本山を管領して、広宣流布の時を待つという住持の僧宝のお立場を面とすることは当然だが、その一辺しか見ることができないのは不信心による痴煩惱というほかないよ。再往、大聖人の下種仏法における法体法義の一切を御相承あそばされる唯授一人の御内証から、御本尊を御書写あそばされるわけだし、また様々な時代における様々な事態に対応して、教義を裁定し、大衆を教導あそばされるところに血脈付法の御法主上人の尊いお役目がありになるのだから、その全体的なお立場を拝することができず、これを法主絶対化などと誹謗するのは、創価学会が身延同然邪宗となった証明だね。

我田引水の御書解釈

阿部

次に彼らは『観心本尊抄』の、「当に知るべし、此の四菩薩、折伏を現ずる時は賢王と成つて愚王を誠責し、摂受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す」（御書 六六一・）との御文を挙げて、地涌の菩薩の働きとして、折伏は賢王の立場が主体となり、摂受は僧の立場が主体であるから、賢王と僧の二者は同格であるとし、むしろ折伏をして広布を推進する主体は在家なのだから、僧に含まれる唯授一人の血脈といえども在家と対等だと論じていますが、この御文についてこのような解釈をするとは、本当に莫迦につける薬はないと言わなければならないでしょうが。

菅野

というよりも、まったくの我田引水だね。彼らはすべて自分たちに都合のよいように御書を解釈するわけだよ。たしかこの御文について日寛上人は、『観心本尊抄文段』に「化儀の折伏」と定義され、涅槃経の仙予国王等の文を引かれて、未来に順縁広布を迎え、賢王が刀剣弓箭鎧等の武力をもって愚王を誠責する時のことを判じられた御文かと解釈なされていたね。

早瀬

その意義からすれば、未だ順縁広布の大闘争の時とも言えない現在の段階で、この『観心本尊抄』の御文を勝手に解釈して、賢王は在家を意味するから信徒が中心となって折伏を行い、僧は出家のことだから摂受を行ぜよなどと単純に定義することは誤りだね。有徳王が悪王と戦い身命を捨てて覚徳比丘を守ったような賢王による折伏は未来のことなのだから、それまでは、いたずらにこの御文にとられることなく、僧俗ともに折伏に精進すべきだと思う。

藤本

その通りだね。大聖人様は『如説修行抄』に、「誰人にても坐せ、諸経は無得道墮地獄の根源、法華経独り成仏の法なりと音も惜しまずよばはり給ひて、諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ。三類の強敵来たらん事は疑ひ無し」（御書 六七三・）と仰せた。この「誰人にても坐せ」の中には、僧侶も信徒も含まれることは当然だよ。折伏についての御指南は他にもたくさんある。忘れてならないのは、大聖人様は僧俗弟子檀那に対して、大聖人様と同様に三類の強敵を呼び起こすほどの強折を行うように、「折伏して御覽ぜよ」と仰せられていることだね。

阿部

そしてその僧俗一同が行うべき折伏を、『観心本尊抄』では賢王による未来順縁広布の時に望んで、敢えて「摂受」と呼ばれているわけですね。とすれば、自分たちが賢王であるかのように論ずる創価学会一味の御書解釈は何ともいい加減で杜撰極まりないものです。もっとも彼らが何と自慢しようと、有徳王なら必ず護るべき覚徳比丘の宗門を、護るところか反対に壊滅させよと叫んでいるのだから、創価学会は永遠に賢王にも有徳王にもなれないことは当然ですね。

八木

御法主上人猥下は去る昭和六十二年の『観心本尊抄』の御講義において、「正法を受持する者はすべて地涌の眷属でありますから、一人ひとり『此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王と成つて愚王を誠責し摂受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す』という御文を拝して、深く自他に対する正見をもって進むべきだと思うのであります」（大日蓮 五三〇号）と御指南なされている。四菩薩の命は我々一人ひとりにも具すわけだから、我らは折伏弘通に際しては常に折伏と摂受の両面を心がけて前進すべきだと思うね。

血脈相承に対する推尊入卑

司会

その通りだと思います。ところで彼らは、『日興跡条々事』に目師を「嫡子分」と表現していることを根拠に、血脈相承を家督相続に当てはめて述べていますが。

菅野

血脈相承を、嫡子が家督を相続することに準えるのは一見正しいように思えるが、やはり間違いだね。というのは、家督相続の要件は長男であるとか、財産管理能力であるとかいろいろあったと思うが、血脈相承はそうではない。大聖人が五老僧に相承なされなかったのは単なる世間の能力の問題ではなく、下種仏法に対する師弟相対の唯我与我の領解に

よるわけだ。血脈相承をもって付嘱される法体の伝持が、単なる世法的な財産の相続とはまったく違うところは、末法万年にわたり、ちょうど今回の創価学会問題のようなことがあっても、決して濁らせることなく清浄に伝えなければならないことだね。

早瀬

彼らは続いて、家財を浪費し、疲弊させ、崩壊の危機を招くようなら、嫡子であっても廃嫡されるように、創価学会を破門した御法主日顕上人は廃嫡されるべきなどと述べているね。しかし、かつての昭和五十二年度路線の折の反省懺悔と日達上人へのお詫びを無慙にも反故にして、再び反逆忘恩の徒となり、宗門への誹毀譏諷を繰り返して三宝壊滅を狙う創価学会が、破門処分を受けたのは当然のこととするのが日蓮正宗僧俗の一致した揺るがぬ見解だよ。

八木

彼らは愚かにも、怨嫉と憎悪に狂い、墮地獄の道を歩んでいるが、それに対し、宗門は「『立正安国論』正義顕揚七百五十年」をめざして真の僧俗一致をはかり、奉安堂を建立して総本山を荘厳し奉り、広宣流布への道を隆々と大前進している。たしかに創価学会自体は永遠に宗門に戻れないが、一人ひとりの学会員は、当然だがいつでも日蓮正宗へ戻れるわけだ。創価学会の邪義を捨てる勇気さえあれば、法華講に入講して、晴れて総本山大石寺へ参詣し、本門戒壇の大御本尊に御目通りも叶うのだよ。元日蓮正宗信徒として広布に励んだ方々が、一日も早く正信に目覚めることを祈るばかりだね。

阿部

創価学会員や離脱僧たちは、御法主上人猊下へのくだらぬ悪口などいい加減にやめて、自分の足元をよく見た方がいいですね。そのうちぱっくり大きな口が開くだろうから。それが恐ろしければ、早く懺悔して、血脈付法の御法主日顕上人猊下に信伏随従し奉り、法華講員として一から清々しく仏道に精進すべきですね。

「宗祖の血脈観」なるものの誑惑

司会

『法主詐称』のねじ曲がった言い分もだんだん終わりに近づいてきましたが、ここで彼らは「宗派の血脈観」を徹底して解体し、「宗祖の血脈観」を回復するなどと壮語していますが。

八木

ここでの彼らの言い分は「正信会」久保川法章の「血脈二管説」と、「顕正会」浅井昭衛の「正統貫首再生論」を取り上げ、それぞれの要旨を紹介して、血脈が器用に二管に分かれたり、相承がいったん途切れても、正統な貫首が再生すれば血脈が再び蘇るなどという発想は、「相承」に宗教的絶対性を認める旧来の血脈観の域を一歩も出ていないと批判し、血脈と法財を分離させた創価学会側の血脈観こそ宗祖の血脈観だとするものだね。

阿部

要するに、目くそ鼻くそを唾うの類ですね。「正信会」や「顕正会」の血脈観と「創価学会」の血脈観にどれだけの差があるのでしょうか。我が儘勝手な邪信論者たちの言なのだから、それぞれ趣旨は違っても邪説に変わりはないと思いますね。

菅野

彼らの血脈観と称するものは、結局は先程の博物館の国宝と一緒に、大聖人の御法を法財と呼び、相承とはその法財の「申し送り・継承のあり方」に過ぎないとするものだね。すなわち宗祖の法財とは「仏の側」に属し、申し送りの在り方は「衆生の側」に属するとし、申し送りに不手際、ギクシャクが起きても、宗祖の法財そのものには何らの損減を与えるものではないと言うわけだ。

早瀬

しかし、そういう考え方は唯物主義に近いし、結論的には謗法になるな。なぜなら、もしそうに考えるとすれば、身延や池上にある法財、すなわち宗祖の真筆御本尊を拝んでもいいことになるからだよ。衆生の側に何があるうが、法財そのものには何の損傷もないと考えるわけだからね。

阿部

はい。たしかに彼らは、「血脈が切れた・切れてないなどの議論に血道を挙げるのは、実に愚かで、不毛の議論だ。相承の断不断は宗祖の法財とは無縁のものだ」と誹謗し、これが「宗祖の血脈観」だと誑惑しています。

八木

創価学会の者たちは長い間本宗の信心につきながら、いったい何を学んできたのか。信心の根本がまったく判ってないね。『三大秘法抄』には、「予年来己心に秘すと雖も此の法門を書き付けて留め置かずんば、門家の遺弟等定めて無慈悲の譏言を加ふべし。其の後は何と悔ゆとも叶ふまじきと存する間貴辺に對し書き遣し候」（御書 一五九五・）と仰せだが、これは三大秘法の法門を書き残しておかなければ、門家の遺弟等が必ず無慈悲の譏言を加えるであろうとの御文だね。では誰に譏言を加えるのか。言うまでもなく、大聖人滅後に血脈付法の日興上人がお立てになるところの三大秘法の法門に対する譏言であることは当然だよ。そう考えれば、「血脈の次第 日蓮日興」の唯授一人の御相承の甚深の意義が明らかに拝されるね。大聖人がどれほど日興上人への付嘱を重大にお考えあそばされたか。

藤本

その通りだね。大聖人の御法は万一誰も正しく受け継ぐものがおらず血脈が途絶えれば、この世から跡形もなく消え失せる危険も存したわけだよ。大聖人様が「其の後は何と悔ゆとも叶ふまじきと存する間」と仰せの通りだね。それを「相承の断不断は宗祖の法財とは無縁」などと、それこそんでもない無慙極まる誑惑だね。

阿部

彼らの言う「宗祖の血脈観」などというものがいかに口からでまかせのいい加減なものであり、宗祖のお心を踏みにじる大謗法であるかが明確となりました。要するに彼らは、骨の髄まで利用信心、利用教学だということですね。

一同

まったくだね。

司会

藤本総監様をはじめ各御尊能化、御尊師には、御多忙のなか、昨秋以来、長期にわたり、邪教創価学会とその走狗憂宗護法同盟の邪義を徹底して破折する貴重な座談会をいただきまして、たいへんにありがとうございました。

『法主詐称』では、最後に御法主日顕上人猥下に対する悪口誹謗を羅列しておりますので、編集室として、これに対して、まことに恐れ多いことながら御法主日顕上人猥下讃歎の辞を作らせていただきましたので掲載させていただきます。

『御法主日顕上人猥下讃歎の辞』

- ・ 宗旨建立七百五十年法華講三十万総登山達成
 - ・ 奉安堂建立による「広宣流布」の法礎建立
- ・ 六壺・客殿建立を始めとする総本山の荘厳整備
- ・ 創価学会の大謗法の徹底した破折と、
その残滓の払拭
- ・ 全国寺院の法華講支部結成を始めとする
日蓮正宗の機構充実
- ・ 血脈相承の御法主上人猥下を中心とした
僧俗異体同心の確立
- ・ 富士学林に大学科の創設等、興学布教の充実
- ・ 世界広布の進展

僧越ながら、こうした点を讃歎申し上げ、「『立正安国論』正義顕揚七百五十年」の大佳節における「地涌の友の倍増乃至、それ以上の輩出と大結集」を達成するために、御法主日顕上人猥下に信伏随従し奉り、僧俗一致の精進をお誓いするものであります。